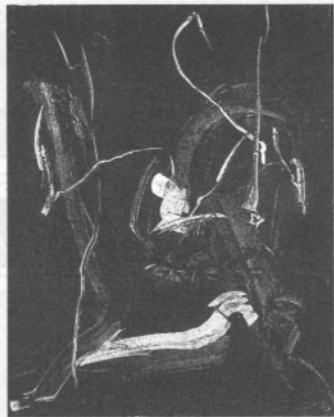




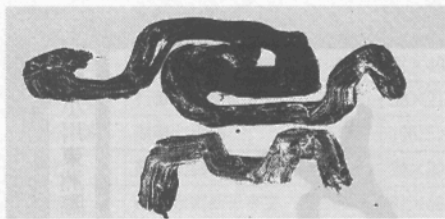
「心線NO. 5」



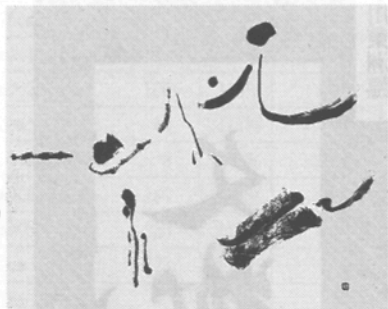
「64-1」



「57-9」



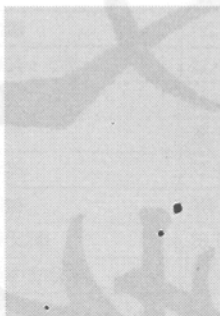
「作品」



「61-1」



「63-3」



「80-1」



「60-1」



「64-8」

「16年ぶり」、回顧展

比田井南谷展「ひろく」

「比田井南谷展」が六月十一日から七月二日まで、東京・中央区の加島美術で開かれている。

同展は、平成十一年に八十七歳で死去した比田井南谷

(一九二二〜九九)の遺作展で、作者の回顧展としては没後一周年を記念して開かれた「比田井南谷展」(東京画廊)以来で、一六年ぶり。

作者は明治四十五年、神奈

川生まれ。昭和十年(二十三歳)に、父天来から「南谷」の号を授けられて、当時、上田桑鳩ら天来門の気鋭の書人らが結成していた書道芸術社の同人となった。同十四年、天来の死去に伴い「書学院」を継承し、以後、書道資料や収集図書管理などに当たる傍ら、「書勢」誌の発行、古碑帖の出版を通じて古典の普及に努めた。

またその一方で、同二十一年の現代美術協会展に「心線作品第一・電のヴァリエーション」を出品して脚光を浴び、以後も、サンパウロ・ヒエンナレーやニューヨークでの個展その他、海外でも精力的な発表活動を展開した。

今回展では、三十代前半から七十年代半ばまでの約五〇点を展示している。まず大作で

は、九三・五×一八四の「作品」(一九六三〜六七)は、上部の渦巻きと下部の濃淡の対比が印象的な一作。黒地のキャンバスに白の油彩による「57-9」(九一×七三)は飛白を想起させる線の動きを見せる。

線表現を主体とする作調の中、鳥の紙に墨の「80-1」(一〇三×七三)は右辺から下辺への「三点」と中心部の押印のみの点描表現。「63-13」(八六×六〇)、「64-11」(一一二×九五)、「64-8」(一一三〇×九〇)は、文字、偏旁を思わせる構成的な作調。

その他の主な出品は、「心線No.5」(No.24)、「No.27」(58-3B)、「No.35」(57-10)、「59-13-2」(59-22)ほか(タイトルは制作年の西暦による)。

問い合わせ等は、〇三—三七六—〇七〇〇の加島美術へ。